事がないのですよ。此間OとIとNとEとがかけて來てね、いくら放して頂戴つてもきかないでね、どう〳〵袖付をほころばして了つたんですよ。可愛いのね、Kは人なつこくない子ね、先生から避けて許り居るんですもの」

B「Kも此頃は勢力がなくなりましたよ。」

A「Kがリーダーなる所以がたゞ睨むといふ一つにあるといふ事が可笑しいぢやありませんか。あゝした子供の社會にも悲しいいたましい事が行はれてると思ふとゾッとしますね、いつかね。お砂場で三人ばかり山をこさへて頂上から毬ころがしをやつて居たの。「僕が一等、二等がA君、T君は弱いから一番あと」かういつてたのを聞くと涙がこぼれる樣でした。原人的の生活が隨分見られるんですもの。力の弱いといふ事が子供にとつてどんなに情けない事でせう。さうした壓迫をうけて居る子は大人になつてから幼年時代の喜びといふ事を思へるでせうか。だから私はまづ力の强い子にしてやりたい、精神的にも身体的にも。」

B「けれど其中に又優しみがなければ駄目ですね、Mは亂暴だけれどさうした優しみのある子ですよ。」

A「あの組の男の子にはさうした優しみを持つてる子が隨分ありますね、Oは、よくお姉さんが來るんですよ、お姉さんなんていふと隨分大きい樣な氣がしますけれどね、尋常一年なの。さうするとOは喜んで〳〵一緒に本を見たり手をつないで歩いたり他の子と遊びはしないの。私それが涙の出る程嬉しかつたの。Sもさうですの。お姉さんが小學校に居るんですよ。いつか何と思つたか默つて入つて行つてお姉さんの傍にぢつと立つてたんですつて。可愛いぢありませんか。私はほんとにさうした奇麗な優しい心持を養つてやりたいと思ふの。Iもかあい子でせう？目をクル〳〵さして。」

B「えゝほんとに可愛の、此頃は何でもする樣になりましたよ。Aも毎朝なかないし……」

A「まあ嬉しいこと、みんながだん〴〵よくなつて行きますね。」

教生室の窓より

いづみ

□ある意味に於て、三年六ヶ月の學科生の時よりも一層得る所のあつた教生の生活、たゞ學ぶよりももう一歩先迄踏み出す所に望もあり面白味もあつた教生の生活、規律の中に快い自由を見出し得たこの十四週間は實に私にとつて永久に忘れがたい時である。女學校もたのしかつた。幼稚園も平和であつた。小學校もうれしい。絶えず流れ出る感謝の思の中に今や私の教生生活は終を告げ樣として居る。書き出せば限りもない。こゝにはたゞ女學校で特に感じたことを日記の中からぬき出して記しておきたいと思ふ。

□殆ど傳說的に傳はつて來た教生といふものゝ一面を今度は見なければならないのかと、教へる事に對して以外に抱いて居た一種の豫感は全くむだな事であつた。私には今迄の人がどこがいやだつたのか、何がつらかつたのか少しもわからない。教壇に立つて居る間、私は實に愉快であつた。すなほな鳩の樣な少女達の眸がみんな自分の方に集つて居る。こんな時にはいつも目に見えない所で、心と心とが美しくとけ合つて居る樣な氣がしてほんとにうれしかつた。運動場では罪のない事を言つては笑ひころげて居る。いかにも明るい光の中に育つた人達だといふ事をしみ〴〵感じさせられる程この人達は晴やかな氣持と純な心とを持つて居る。地方の子には決して見出し得ぬ美しい快さをこの人々は備へて居る。私はこの人々がいつ迄もこの明るい氣分を失はない樣にと祈つて居る。

□ある日、ある級の國語を見てつく〴〵思つた。私はどうにかして女學校の國語をもう一段上のレベルまで押し上げたい。そして又こんな斷片的なもの許りでなくも少し連續的なものをも讀ませたい。ドイツの小學校等でウイヘルムテルの類をテキストに用ひるといふ事は屢お講義の時にも伺つて羨ましく思つて居たがこゝに至つてます〳〵それを感じる。同時に日本文學の貧弱である事が悲しく、漢字だの假名遣だのいふものがうらめしい。これは自分がこれに通じても居ないくせに口にするのは少々をこがましい次第であるが。それでも「おぼしき事いはぬは腹ふくるしわざ」であるから。これあるが爲にどれ

だけ日本の國語文學といふものがしばられて居るであらうか。自分で自分を縛つて動きのとれない樣にしてもがいて居る。いつになつたら思ふ樣羽をのばすことができるのだかわからない。チョーサーがまだ生れもしない中に日本には源氏物語があつた。枕草紙もあつた。あのまゝですつと續いて來たらどんなものになつて居たのだらう。私は時々こんな事を考へても見る。

□自分自身が女學校の時に國語や作文に對して持つて居た、又今でも持つて居るだけの興味を生徒も持つて居るだらう、と思つて居たのは少しまちがつて居た。教科書以外に何か讀んで居るものは殆どない。雜誌を讀んで居るものは婦人世界、婦人畫報、少女の友、少女世界等の種類らしい。今は、これらの人達——女學校の上級生、——より少し下の少女達のよむ雜誌は餘る程ある。そして私はどれが大變惡いとも思はない。可愛いゝしんみりした少女小說等は、決して惡いものだと私は思はない。寧ろ情操の陶冶の方面から、これらのものを要求するこの人達の時代に雜誌等で少し注意したならば、かへつて目に見えない効果を內面に與へはしないだらうか。しかし少女雜誌は上級の人達には幼稚すぎる。女學世界、婦人世界は家庭の人には向うがこの人々には餘り面白くない。私達ならば、まづ一般男子の人の讀む種々の雜誌——それは純文學的のものでも又そうでないものにしても讀む雜誌はかなり多い。がこの人々にはまだ少し難しいであらう。丁度上と下とがあつてその間がない。雜誌を讀まないのは一方からは適當なものがないからである。實に氣の毒でたまらない。

「先生ひまがないのですもの。忙がしくて〳〵」と一人が言ふ。「先生よみたいのですけれど何を讀んでいゝかわかりませんわ。」と一人が訴へる。「何を讀んでいゝかわからない」といふのはほんとに尤もな話だと思つた。「かういふものは讀んではいけない、これもいけない」。と言つてくれる人はあつても「これをお讀みなさい」と親切に言つてくれる人がないとキット少女達は困つて居ることであらう。

氣の毒な可愛いい人達よ。日本にはほんとにあなた方のよむ適當な本が少いのです、と私は心の中で

言つた。しかしこれに私達にとつてずい分考へなければならない大きな問題である。それから近い樣であつてこの人達と自分達とはよほど趣味がちがつて居るといふ事をも見出した。一体にどちらかといへばクラシカルのものを好む傾向がある。であるから日本の古いものゝ中適當なものを選んで讀ませてやるのもいゝかと思つた。しかし自分としてはやつぱり少は飜譯の下手な所はあつても飜譯物の方が形式からも內容からも高い樣な氣がする。どうしてもその底を流れて居る生命の光がある樣な氣がする。いつになつたら日本文學はこの高さに迄達することが出來るのであろう。ほんとに私達はもつと〳〵心の目を見開かなければならない。空を見上げなければならないと思つた。こゝで一寸面白い事を思ひ出した。ある時一人の生徒に「きのふの空の美しかつたこと、」とふと思ひ出して言つたら、「きのふつて先生、私ちつとも空なんて氣がつきせんでしたわ。」と言つた。空を見ないで何を見て居るのだらう。大空に溢つて居る光を仰がずに、何に目を注いで居るのだらう。空は私の生命である。あの大空を深く靜かに流れて居ると同じ力が私の胸の中にも流れて居るのだ。この時ふと私は何か言はうとしたが口をつぐんで終つた。この生徒は色色面白いことを言つた。「先生私達はお下げにしたり、束髮にしたりちつともきまらないのでムいますよ。一寸變り目で。」と笑つた。たゞ外形ばかりであらうか。否否同樣に內的生活もたしかに變りつゝあるのであらう。自分でもそんなに氣がつかないかも知れない。私達だつてたつた六週間位居たゞけではわかり樣もないけれど、一寸參觀に行つても四年と三年とはよつぽどちがふ。五年は更にちがふ。こんな事を考へ出すといよ〳〵敎へるといふことが難しい仕事に思はれて仕樣がない。一人の友は、「たゞ國語なら國語を敎へて行くといふ、そこに面白味があるのだ。」と言ひ張つた。私はとてもこれだけで滿足はできない、もう一歩先迄ふみ出し度い。

□作文の時も書くことを餘り多くは持つて居ないらしく思はれた。矢つ張讀むことが少いからでばあるまいか。一年かゝつてあのうすい讀本二冊、あれがまづ彼女達の文學的方面のハーベストの重なるもの

である。殊にその中には粟だの稗だのが一ぱい雜つて居る。どう思つても讀書が足りない。それからこの人達の言葉と文章とが別々な形なのだからずい分骨の折れる事であらう。と氣の毒でたまらない。文字でもこの觀るはこういふ時につかふ、この見るはこんなに見るのだ等といふ面倒さをとつくの昔通り越して文字はたゞ音をあらはす符徴にすぎない位のものであらう。あゝ早くどうにかしたい。しなければならない。しかし自分の力ではどうする事も出來ない。

□それから作文について思ひ出すことの一は文法である。一生徒が「先生文法なんてほんとに必要がない樣な氣がしますよ。だつてあんなこと習はなくてもちやんと分つて居るのですもの。」と言つた。必要がない、必要がない。これだけの言葉が、明かに今の文法といふ學科の價値を語つて居ると思はれる。どうすればもつと國語と文法とを密接な關係あるものにできるであらうか。そしていつもよく伺つて居た樣に——勿論その言葉の性質にもよるであらうが——ドイツでは小學校の上級になると文法上の誤謬なんか一つもなくなるといふ樣に、日本でもそうなればどんなにうれしい事であらう。多くの生徒は「もう〳〵文法ほどいやなものはございません」。と言つた。ほんとを言へば敎へる者自身もそんなに文法を面白いものだとは思つて居なかつた。しかし今こゝで敎へて見て、むづかしものだと知つて、はじめて一種の面白味を感ずる事が出來た。これは苦しい文法といふものを二時間もたされて得た尊い賜物であつた。

國語の讀本と關聯して例などもなるたけ讀本の中から出せとは學科生の時分によく〳〵伺つて來た事であつたが、一体どうすればこの國語の讀本とこの文法の敎科書との連絡がつくのかとう〳〵ちつともわからなかつた。どうしても文法は文法として特別な學科としておくより外道がないのであらうか。わからない事があつたらお聞きなさい」。と言つてもだまつて居る。どうしたらよく文法を敎へることが出來るだらうかと靜に考へても見た。例を出して發問すれば半分も手が上らない。尤も文章篇だから無理もないが動詞をつかまへて主語だと言つて見たり名

詞を說明語だ等といふ生徒もあつた位にわかつては居ないのである。主語とか說明語とかいふ言葉は知らなくてもまさか書く時に間違へる事はないからこれは後でもいゝとして、とに角一番誤り易い動詞の活用や助動詞への連續やは小學校の上級の時からでもその場合々々に當つて敎へて行かれない事はないと思ふ。

とに角國語や文法について解決されねばならぬ大きな問題の横はつて居る事を敎へて見てはじめて痛切に感じたのは私には誠に貴い大い賚賜であつたと思ふ。

圖書室よりの一隅

私はさしよのひつじであります。我が圖書室は文科の私どもには柔い香りの高い草の生ふる廣野である。外國から來る月々の報告、論文、雜誌、我が國の新刊書の數々、南蠻文庫武田文庫の各種、いづれも强い力を以て私どもを引つけます。

もう雪も消えました。春は甦りました。

上には明るい空を春の光を帶びた雲がゆる〳〵動いて居ります。下には青々した野が霞の中へつゞいて居ります。いで柔い草を踏んでゆるやかに野をあさりませうか。

中等學校に於ける作文教育

ボストンの Girls' Latin School の Carolin M. Gerrish 氏が校長會席上の講演の大要を申します。ひつじには少し硬すぎます。

この講演は三の部分から成り立つて居る。即ち(一)作文科が生徒の心の發達にどれくらゐ役に立つて居るか。(二)初等學校と中等學校との連絡はどうなつて居るか。(三)學校敎育の全体に通じて作文科のはたらきが行き屆いて居るかといふ問題を論じてある。これは孰れも我々の常に注意して居る問題であるが、まだ〳〵未了の問題として殘つて居る。

G氏のいふところに依ると、(一)作文が心の發達に及ぼす作用は二方面ある。一は考へる力を作ることであり、二は思想・行爲・情緒を確に美しい言語でいひ表はす力を與へることである。ところがどうも作文では考へること感ずることを書く前に書き表す方を習はねばならぬことゝなつて居る。今日の見方からいへば決して不自然ではないが一たい書き表はす前に考へなければなるまい、感じなければなるま